

令和5年度 事業報告書

(令和5年4月1日～令和6年3月31日)

学校法人 上野学園

I 法人の概要

設置する学校・学部・学科等

上野学園大学

音楽学部 音楽学科 器楽コース
 声楽コース
 グローバル教養コース
 演奏家コース
 音楽専攻科 音楽学専攻
 器楽専攻
 声楽専攻

上野学園大学短期大学部

音楽科
 専攻科 音楽専攻

上野学園高等学校

全日制 普通科 特別進学コース
 総合進学コース
 全日制 音楽科 演奏家コース
 器楽・声楽コース

上野学園中学校

アドヴァンスト・コース
 プロGRESS・コース

学校・学部・学科等の学生・生徒数（令和5年5月1日現在）

学校	学部・学科等	入学 定員	収容 定員	入学 者数	在籍 者数
上野学園大学	音楽学部音楽学科	0	100	0	21
上野学園大学短期大学部	音楽科	50	100	28	65
上野学園高等学校	普通科	160	480	160	478
	音楽科			0	9
上野学園中学校		80	240	51	148
合 計		290	920	239	721

役員等の概要（令和5年5月1日現在）

理事 6名 石橋香苗（理事長）、石橋慶晴、ジャン＝フランソワ・ミニエ、江幡亜木、
 松平恒和、土屋正孝
 監事 2名 鈴木達也、高木充利
 評議員 15名

教職員構成、人員数（令和5年5月1日現在）

教員／事務職員	専任	非常勤	合計
上野学園大学	15	17	32
上野学園大学短期大学部	8	37	45
上野学園高等学校	52	55	106
上野学園中学校			
事務職員	32	17	49
合 計	106	126	232

※学校基本調査に記載している人数に基づく。

上野学園の沿革

1904 年 11 月	建学の精神を「自覚」として、石橋藏五郎が私立上野女学校を創立 (下谷区上野桜木町 2 番地)
1910 年 9 月	財団法人私立上野高等女学校認可
1912 年 10 月	浅草区神吉町 46 番地（現台東区東上野 4 丁目）に移転
1913 年 4 月	私立上野実習女学校を設置
1914 年 11 月	私立上野実習女学校を、私立上野家政女学校に改称（1945 年廃止）
1946 年 4 月	上野女子高等学院（文化科・家政科）を設置 上野高等女学校専攻科（英語科・被服科）を設置 財団法人上野学園に改称 上野高等女学校が東京都の音楽研究指定校となる
1947 年 4 月	上野学園中学校を設置（学校教育法実施により上野高等女学校および同専攻科は上野学園中学校・上野学園高等学校に改組。高等学校は翌年に設置される）
1949 年 4 月	上野学園高等学校に全国初の音楽科を設置 上野学園高等学校別科を設置
1951 年 3 月	学校法人上野学園に変更
1952 年 4 月	石橋益恵、学長に就任 上野女子高等学院を廃止
1956 年 4 月	短期大学家政科を設置（2006 年廃止）
1958 年 4 月	上野学園大学開学、音楽学部器楽学科・声楽学科・音楽教育学科を設置 石橋益恵、学長に就任
1959 年 3 月	短期大学音楽科を発展的に解消
1961 年 3 月	上野学園家政高等学院が上野学園草加高等学校に改組
1963 年 4 月	大学音楽学部器楽学科に日本初のチェンバロ専門、音楽教育学科に音楽学専門を開設
1963 年 10 月	大学音楽学部、日本音楽史料の組織的収集に着手
1964 年 4 月	石橋藏五郎逝去
1964 年 6 月	石橋益恵、理事長に就任
1966 年 4 月	大学音楽専攻科（音楽教育専攻・器楽専攻・声楽専攻）を設置 短期大学音楽科を再設置（埼玉県草加市）

1968 年 4 月	短期大学専攻科（音楽専攻）を設置
1969 年 4 月	大学音楽学部器楽学科に日本初のリュート、ヴィオラ・ダ・ガンバ、リコーダーの各専門を開設
1970 年 4 月	大学音楽専攻科の音楽教育専攻を音楽学専攻に改称
1971 年 4 月	大学音楽学部器楽学科に日本初のギター専門を開設
1973 年 4 月	研究施設、上野学園日本音楽資料室を創設
1974 年 11 月	創立 70 周年記念講堂（石橋メモリアルホール）竣工
1981 年 4 月	石橋益恵、学園長に就任 石橋裕、上野学園大学および上野学園短期大学長に就任
1985 年 4 月	短期大学家政科を草加キャンパスに移転、短期大学を集約し、名称を上野学園大学短期大学部に改称 短期大学部人文学科（英語専攻・文化専攻）を設置
1992 年 2 月	石橋益恵逝去
1992 年 3 月	石橋裕、理事長に就任
1992 年 4 月	上野学園大学短期大学部専攻科国際文化専攻設置
1995 年 4 月	短期大学部人文学科を大学国際文化学部へ改組転換、英語と英国・アイルランド文化コース、スペイン語とイベリア、ラテン・アメリカ文化コース設置
1996 年 3 月	国際文化学部への改組転換により、短大部人文学科廃止
2000 年 4 月	短期大学部音楽科に音楽療法士養成教育課程を開講
2004 年 4 月	上野学園大学音楽・文化学部を設置（音楽学部と国際文化学部を統合） 音楽・文化学部音楽学科に演奏家課程を設置
2004 年 11 月	創立 100 周年記念式典挙行
2005 年 4 月	大学演奏家課程を演奏家コースに改称 高等学校音楽科に演奏家コースと器楽・声楽コースを設置 大学音楽・文化学部国際文化学科、短期大学部音楽科、家政科、上野キャンパスへ移転
2006 年 10 月	日本音楽資料室を上野学園大学日本音楽史研究所に改称
2007 年 4 月	石橋裕、学園長に就任 石橋慶晴、理事長に就任 上野学園大学・同短期大学部、上野学園中学校・高等学校を男女共学化 高等学校普通科に特別進学コースと総合進学コースを設置 創立 100 周年記念事業として新校舎竣工
2007 年 9 月	上野学園楽器展示室を開室し、上野学園所蔵の古楽器を公開
2007 年 10 月	上野学園大学日本音楽史研究所を草加キャンパスに移転
2009 年 4 月	原田禎夫、上野学園大学・同短期大学部学長代行に就任
2010 年 2 月	新講堂（上野学園 石橋メモリアルホール）竣工
2010 年 3 月	大学音楽・文化学部国際文化学科廃止
2010 年 4 月	大学音楽・文化学部を音楽学部へ改称 上野学園大学日本音楽史研究所が大学附置研究所となる 高等学校普通科に特別進学コース α ・ β を設置
2010 年 5 月	音楽文化研究センターを大学音楽学部の附属機関として設置

2011 年 4 月	石橋裕、上野学園大学名誉学長の称号を授与される 前田昭雄、上野学園大学学長に就任
2014 年 9 月	石橋慶晴、上野学園大学短期大学部学長に就任
2014 年 11 月	創立 110 周年記念式典举行
2015 年 4 月	ミュージック・リサーチ・コースをグローバル教養コースに改称 グローバル教養コースに文化創造マネジメント専門を開設 船山信子、上野学園大学学長に就任 中学校音楽コース、普通コースをアドヴァンスト・コースとプログレス・コースに改編 高橋公三子、上野学園中学校・高等学校校長に就任
2015 年 12 月	上野学園大学日本音楽史研究所を上野キャンパスに移転
2016 年 4 月	上野学園高等学校との連携プログラムを施行
2016 年 6 月	石橋香苗、学校法人上野学園理事長に就任
2017 年 1 月	石橋裕学園長逝去
2017 年 4 月	皆川弘至、上野学園大学学長に就任 石橋香苗、上野学園大学短期大学部学長に就任
2019 年 4 月	前田昭雄、上野学園大学学長に就任
2020 年 4 月	吉田亘、上野学園中学校・高等学校校長に就任
2022 年 4 月	上野学園大学短期大学部専攻科が独立行政法人大学改革支援・学位授与機構の認定を受ける
2023 年 6 月	上野学園がケンブリッジインターナショナル認定校となる
2024 年 2 月	上野学園中学校国際コースが文部科学省より教育課程特例校に指定される

II 事業の概要

<学園全体>

1) 主な事業の概要

学園創立119周年にあたる令和5年度も令和4年度に引き続き、「Revalue 再び価値を見直す」 「Cross-sectional 横断的な豊かな学び・研究」の視点から、教学、法人面における精査、改善を実施した。

まず「Revalue」においては、1) 伝統校として培った教育のノウハウ、知的財産を活かした特色のある学びを新たに打ち出していくこと、2) 特色ある学びに基づく一貫教育の充実に向けて環境を整備すること、3) 法人においては、平成30年度より引き続き業務改善に取り組むことに加えて、業務の効率化に向けて抜本的な見直しを行うことに取り組んだ。

次に「Cross-sectional」においては、1) コースに限ることのない、横断的かつ多角的な学びの実現のための教養科目と選択科目を充実させること、2) 実技面における多角的な学びを充実させること、3) 日本と海外との交流、海外留学・研修制度を充実させるための計画、4) 地域連携の促進を実施していくことに取り組んだ。

財務基盤については、昨年度のホールの資産売却により、収支赤字の削減と運用資産余裕比率が改善している。

令和 6 年度に創立 120 年を迎える上野学園が、永きにわたり培ってきた音楽教育を特徴として、自ら考える力、真の教養と長けた創造力、国際的な視野を持ち合わせたリーダーを育ててい

くこと、生徒学生が自立して社会で活躍できる人材となることを学園のミッションとする。

創立 120 周年に向けて「UG120 プロジェクト」の検討を行った。

2) 国際コースの開設

上野学園創立 120 周年にあたる令和 6（2024）年度に中学校に国際コース（入学定員 20 人）を開設すべく、国際コース準備室が精力的に活動した。その結果は以下の通り。

①令和 5 年 6 月 7 日付で、ケンブリッジインターナショナル認定校となった。

②令和 6 年 2 月 6 日付で、文部科学省より教育課程特例校の指定を受けた。

国際コースは、世界で最も普及しているケンブリッジ国際教育プログラムに CLIL（Content and Language Integrated Learning。教科内容と言葉の統合教育）の手法を採用しており、これは一条校では初めてである。入学時に高度な英語力を求めておらず、一般の小学生を受験対象にしている。

生徒募集活動は、令和 5 年 5 月～体験会（オンライン／対面）を開催し、体験授業や入試模試等を実施した。第一期生として 6 人が入学となった。

3) 情報発信力の強化

① 広報ツールの整備

広報媒体は 2022 年度に加えて資料請求数増加のために低価格だが 1 媒体を加え、結果的に増加を得た（総数の前年度比は 170%）。広報予算のコスト削減と周知増大を図るために、主力の印刷物を学校案内 4 月、入試要項 6 月の予定で完成させ、同時にデジタルパンフ化、PDF 化を図りホームページに掲載を行った。入試ガイド、短大メリットのチラシ等は、わかりやすく訴求効果の高いものへと更新を行った。

<表 1：2023 年度資料請求者数>

2023 年度月別資料請求者数 （下段は前年）														前年比
	2023 年 4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	2024 年 1 月	2 月	3 月	総計	
	2022 年 4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	2023 年 1 月	2 月	3 月	総計	
総反応数	161	115	99	108	115	76	65	76	61	92	156	122	1,246	170%
	60	66	89	75	84	52	51	64	48	40	103	60	732	
既卒	19	14	16	19	24	21	14	31	14	25	21	23	241	123%
	18	25	27	4	23	15	18	12	14	12	28	9	196	
高3生	85	79	35	32	37	24	16	12	21	18	16	4	379	146%
	22	25	33	37	32	20	15	32	14	9	21	1	260	
高2生	41	18	35	32	29	16	14	10	14	30	98	76	413	287%
	10	4	16	12	14	8	7	8	12	9	44	20	144	
高1生	9	5	14	25	25	14	20	22	11	18	21	20	204	204%
	10	5	13	14	14	4	6	5	7	8	14	25	100	
高3既卒合計	104	93	51	51	61	45	30	43	35	43	37	27	593	130%
	40	50	60	41	55	35	33	44	28	21	49	10	456	

<表 2：2020 年度～2024 年度入試受験者数の推移>

専攻科	志願者数からの入学者の推移			
	志願者	受験者	合格者	入学者
2022	2	2	2	2
2023	3	3	3	3
2024	5	5	5	5
音楽科	志願者数からの入学者の推移			
	志願者	受験者	合格者	入学者
2020	49	46	43	40
2021	45	43	42	37
2022	36	35	35	35
2023	31	30	29	28
2024	29	29	28	27

② オンラインツールの整備

X (旧 twitter)、LINE、インスタグラムの運用を継続し体験レッスン、個別相談、ZOOM 対応を継続して行っている。加えて Web 出願を導入し出願のしやすさと作業の効率化を図った。
 インスタグラムフォロワー数：161 (最低必要数の定員の 3 倍に到達) /LINE 友達追加数：442
 /X フォロワー数：1601 (20240509 時点) となっている。

③ 高校訪問の強化

高校訪問は 2023 年 4 月 1 日から 2024 年 3 月までに 900 校の訪問を行った。2022 年度までは進路指導教員を中心に訪問をしてきたが、2023 年度は、音楽教員、部活動顧問教員が進学にかかわることが多いことや、音楽室や部室にチラシを掲示するケースが多いことから訪問対象を音楽教員とし、重ねて本学教員による高校訪問も開始をした。訪問時には、メリットチラシの内容と入試ガイドの内容を中心に説明を行った。訪問の様子から好印象だが認知は広がっていないため、この認知を広げる活動が訪問の目的となる。高校教員には、チラシの掲示もお願いをして、快く引き受けていただいている。掲示をされたチラシによって、オープンキャンパスに来校するケースも増えてきた。加えて、高校訪問時に出張レッスンや出張指導の開拓も行っており、成果を出しはじめている。

④ オープンキャンパス

参加者数については、全体として前年度比 113%となった。オープンキャンパスでは、スタッフ学生の動き方を工夫し、またメリットの説明、受験準備を早めにするよう促す具体的方法のお知らせ、個々の相談に丁寧な対応をするなどの改善を継続したことで、「やや不満」「不満」のアンケート回答は「0」だった。また、今年度の入学者の 2/3 はオープンキャンパスに来校しており、1/3 は個別説明と体験レッスンのみで受験を決め、入学へ至っていることが分かっている。オープンキャンパスを含め新規の来校者の獲得増がカギとなる。

<表 3 : 2023 年度実施オープンキャンパス参加者数の前年度との比較>

2023年度オープンキャンパス参加者数										新規者: 来校が年度内初めて									
No.	開催日	全体合計 (家族保護者含まず)			既卒			2024卒生			2025卒生			2026卒生			体験レッスン		
		参加者数	内新規者	前年	参加者数	内新規者	前年	参加者数	内新規者	前年	参加者数	内新規者	前年	参加者数	内新規者	前年	参加者数	内新規者	前年
1	3月26日(日)	11	9	6	3	3	3	5	4	2	3	2	1	0	0	0	6	4	2
2	4月16日(日)	8	8	8	2	2	1	6	6	6	0	0	1	0	0	0	2	2	5
3	4月30日(日)	4	4	9	3	3	4	1	1	3	0	0	2	0	0	0	3	3	9
4	6月25日(日)	24	17	24	7	7	13	11	4	9	2	2	2	4	4	0	15	9	13
5	7月30日(日)	14	10	11	5	2	0	6	5	2	2	2	7	1	1	2	9	7	8
6	8月20日(日)	32	27	25	5	3	3	8	5	6	12	12	4	7	7	12	17	15	7
7	9月10日(日)	16	10	0	4	3	0	4	2	0	5	2	0	3	3	0	12	6	0
8	10月1日(日)	11	3	23	6	2	14	4	1	5	1	0	4	0	0	0	11	3	14
合計		120	88	106	35	25	38	45	28	33	25	20	21	15	15	14	75	49	58
		113%			92%			136%			119%			107%			129%		

来校者確保のための対応として、資料請求者から来校者を確保するために、メールでの案内に加えて、電話での案内を実施した。対象者は資料請求者すべてとした。

2023 年度入試の募集状況について改善した点が多かったにも関わらず出願数が十分に伸びなかった。

資料請求数増加、イベント来校者数は昨年とほぼ変わらず、高校訪問数は 1,000 校以上、オープンキャンパス満足度はほぼ 100%にも関わらず、出願者数が昨年を下回った原因として考えられるのは、短期大学としての魅力の打ち出しが充分ではなかったことなので、2022 年度中に、魅力打ち出しのための学校案内の早期制作、入試ガイド制作、メリットに関するチラシ制作を行った。

<表 4 : 2023 年度イベント新規参加者数>

2023年度月別新規来校者数(OC、体験レッスン者、見学個別相談) 下段は前年															
新規来校	2023年 3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2024年 1月	2月	総計		
	2022年 3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2023年 1月	2月	総計		
2026卒	0	0	0	5	1	7	3	0	0	0	0	0	16		
	0	0	0	0	2	13	0	1	0	0	0	0	16		
2025卒	2	0	0	5	2	13	2	1	0	1	1	1	28		
	1	1	2	2	7	4	1	2	0	1	0	1	22		
2024卒	4	7	3	5	5	5	2	2	1	1	0	0	35		
	2	4	1	11	6	3	1	3	1	0	0	0	32		
既卒	3	5	0	7	4	4	3	5	3	4	2	2	42		
	2	2	6	10	0	3	1	14	7	3	1	1	50		
合計	9	12	3	22	12	29	10	8	4	6	3	3	121		
	5	7	9	23	15	23	3	20	8	4	1	2	120		
既卒高3合計	7	12	3	12	9	9	5	7	4	5	2	2	77		
	4	6	7	21	6	6	2	17	8	3	1	1	82		
※合奏講習会含まず															

2024 年度入試は 2023 年度比 1 名減の結果となった。今年度の様々なデータにおいて多くは増加であったが、減少のデータもあった。原因は様々あるが、一つ一つのデータの増加数が大きくなることにより、他のデータをカバーすることになり、全てのデータにおいて一層の増加をはかることが入学者増への方向性で、特に新規来校者数の増加のための活動が重要となる。

＜大学・短期大学部＞

1) 教員の適正な配置による教育の質保証（大学・短期大学部）

大学は、学生募集停止により開講科目が徐々に縮小されているが、学生の履修計画に沿った科目開講を最優先にした上で、担当教員の配置を見直した。

短期大学部においても、授業科目数と学生数・教員数のバランスを見ながら、規模に見合った授業科目を開講している。

2) 認定専攻科（短期大学部）

2 年間の学修を通してより学びを深めたい意志をもつ学生が学修を継続できる環境を構築し、音楽における総合的な実践的能力を身に付け、学士の学位を取得し、キャリアの可能性を拡げるため、学位授与機構の認定を受けた専攻科を令和 4 年度に開設し、令和 4 年度は 2 名、令和 5 年度には 3 名の入学があった。進学先の選択肢として定着し始めている。

3) 社会人学生（短期大学部）

社会人学生の入学者数は安定しており、一定数の社会人学生が入学している。学び直しやキャリアアップのための資格取得、定年退職後の新たな学びなど、目的、バックグラウンドは様々であるが、自身の生活に沿った学びの形の実現のため履修上の助言を行い、リカレント教育を推進している。

年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
社会人学生（人）	7	7	7
入学者数における割合（％）	18.9	20	25

4) 長期履修学生制度（短期大学部）

長期履修学生制度は、社会人学生の入学者数とともに並行して順調に一定数の入学生を得ている。職業を有している学生や家庭の事情を抱える者などそれぞれの生活に合わせながら、時間を有効活用した学修計画を立てるスタイルが定着している。

年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度
長期履修学生（人）	5	6	6
入学者数における割合（％）	13.5	17.1	21.4

5) 吹奏楽指導者認定プログラム（短期大学部）

部活動の地域移行により需要が見込まれる吹奏楽指導者を育成するため、吹奏楽指導者認定プログラムを令和 5 年度より実施した。このプログラムは実技だけでなく、「教育原理」と「法令順守と安全管理」を学び、教育者としての資質を身に付けることができる点が特徴となっている。

6) ボランティア活動 (大学・短期大学部)

コロナ禍により中止となっていたボランティア活動は少しずつ再開となり、今年度は次のボランティア活動が行われ、チャリティー演奏によって地域活動に参加した。

日付	内容	会場
7月9日(日)	第36回下町七夕まつりへの参加	かっぱ橋本通り
11月19日(日)	北とぴあ ロビーコンサート	北とぴあ
12月19日(火)	社会教育センター ロビーコンサート	台東区社会教育センター

7) 演奏活動 (大学・短期大学部)

令和5年度に実施した大学および短期大学部主催・参加の演奏会は下記の通りである。

〔令和5年度上野学園大学・同短期大学部主催・参加演奏会〕

日付	演奏会	会場
5月12日(金)	春の演奏会	飛行船シアター
9月7日(木)	上野学園大学による午後のコンサート・シリーズ 33 ～リコーダー・アンサンブルと合唱～	台東区立旧東京音楽学校 奏楽堂
10月10日(火)	上野の山文化ゾーンフェスティバル No.8「ヴィオラ・ダ・ガンバの世界」	上野学園 楽器展示室
10月27日(金)	第36回 短期大学部定期演奏会	飛行船シアター
11月24日(金)	第72回 オーケストラ定期演奏会	飛行船シアター
1月27日(土)	上野学園ミュージアム・コンサート「17世紀 フランスにおける器楽合奏ファンタジーの 諸相」	上野学園 1507 室
2月16日(金)	第11回 ウィンド・アンサンブル定期演奏会	飛行船シアター
2月22日(木)	短期大学部音楽科卒業演奏会	飛行船シアター
3月1日(金)	大学音楽学部卒業演奏会	飛行船シアター
3月7日(木)	上野学園大学による午後のコンサート・シリーズ 34 ～弦楽とピアノとオーボエ 春の宴～	台東区立旧東京音楽学校 奏楽堂
3月30日(土)・31 日(日)	第13回音楽大学フェスティバル・オーケ ストラ	東京芸術劇場、ミューザ 川崎シンフォニーホール

ウィンド・アンサンブル定期演奏会は学生募集の一翼を担う演奏会でもあり、学園祭で開催したウィンド・アンサンブル発表会とも連動している。

8) 特別公開講座の実施 (大学)

令和5年度に実施した特別公開講座は下記の通りである。

日付	内容	講師／演奏者
5月12日(金)	春の演奏会	学生によるアンサンブル等
9月20日(水)	楽器の特徴・リードを作る工程	広田智之特任教授

11 月 15 日（水）	公開レッスン（ピアノ）	マティアス・キルシュネライト 客員教授
11 月 24 日（金）	第 72 回オーケストラ定期演奏会	宮松重紀指揮 上野学園大学管弦楽団

9) FD 活動（大学・短期大学部）

令和 5 年度は、次の研究会を実施した。

日時 3 月 28 日（金）12：30～13：30

場 所 第 1 リハーサル室

テーマ 上野学園短期大学について

対 象 大学・短期大学部の全教員及び職員

講 師 伊能雅代 入試・広報担当 次長

1 0) IR 活動（大学・短期大学部）

IR 委員会により、定期的なアンケート実施が確立されている。入学時の期待感と卒業時の達成度、在学中の学修時間を継続的に測ることを目的とする。

1 1) 日本音楽史研究所の事業（大学）

○一般業務

史料の収集・維持（保存・修繕・調整）／史料調査・研究／史料閲覧（寄託中の史料もあるため、限定的に閲覧受付）／運営委員会（毎月開催）／研究年報『日本音楽史研究』編集・執筆／架蔵資料等目録の編纂とそのデータベース化準備等

○調査研究

- ・ 12 世紀の楽人 111 人の事績のデータ集積（『楽人補任上巻』収載）。
- ・ 研究年報『日本音楽史研究』第 9 号を令和 6 年度中に刊行すべく、編集執筆作業。

1 2) 就職支援：キャリア支援センター（大学・短期大学部）

① 就職支援の取り組み

一般企業への就職支援、音楽能力を活かした進路への支援等、学生の職業選択の幅を広げるべく取り組んでいる。卒業生の動向は、局面に応じて職員・教員間で情報共有し、メール・電話・対面・オンラインにて相談サポート体制を整えている。

② キャリアカウンセラーの配置と個別指導の徹底・強化の継続

キャリアコンサルタント有資格者による 1 年次個別全員面談を行い、入学後早期に学生の状況・希望を把握。全体へのメールマガジン・個別に即した情報提供を行っている。10：00～16：00 の間はキャリアコンサルタント有資格者が在室し対面、その他日時を希望の学生に合わせ、対面・オンライン・メールにて相談がしやすい環境づくりに努めている。
支援内容としては、「自己分析」、「適職相談」、「履歴書の書き方」（自己 PR・学生生活で力を注いだことなどの書き方）、「企業・業界研究」、「インターンシップへの参加」、「応募書類添削」、「ビジネスマナー」、「面接対策」、「筆記試験対策」「就職情報の提供」「進学・留学関連情報の提供」「内定後の相談」などである。

③ 早期の学生対応

入学後ガイダンスにてキャリア教育講座を実施し現時点での「進路希望・アンケート」を実施。それを基に、全員面談を行い個別の進路希望を把握するだけでなく、信頼関係を構築し相談しやすい環境を整えている。教員志望の学生には、希望進路に関連した学童保育指導員の短期アルバイトやボランティアを紹介し、教職担当教員とも情報の共有を行った。

④ 教員希望者支援

教職担当教員との連携をさらに深め、私学教員・臨時任用・非常勤講師などの求人情報を共有し、スピードをもって卒業生も含む人材の推薦なども行っていった。また、現在は教職における採用面接でも、ストレス耐性や柔軟なコミュニケーション力などが年々重要視されてきているため、キャリア支援センターでの面接練習なども促進している。

⑤ インターンシップ提携企業との親交

以前から引き続き、音楽療法を積極的に取り入れているデイケア老人福祉施設・学童クラブ・児童館運営などの事業を行う企業2社と連携し、音楽療法および学習補助・介護補助を行うインターンシップの参加を呼び掛けている。一般企業のインターンシップはナビ会社イベント案内をし、啓発的経験を促している。

<中学校・高校>

1) 広報活動の強化

① 生徒募集活動の実施

令和5年度は校務の役割を明確化し、各人1つ重要な役割を担ってもらった。学校説明会は、予約制であるものの全て実施することができ、昨年に加えて高校受験生に焦点を当てたミニ文化祭「オープンスクール」や中学受験生には初見の方を限定にミニ説明会等を行った。昨年度比で、説明会の出席人数は、高校は昨年度並み、中学は昨年度より増加という形となった。外部相談会も地方自治体主体のものがほぼコロナ禍以前の実施数に戻り、活気のあるものとなった。

昨年度発足した入試検討委員会では、中学入試の日程や入試問題の方向性を、高校入試では内部進学の見込み、外部入試の推薦基準等今後の学校教育に関わる事項を議論できた。「自分の可能性を見つけ、深められる」学校づくりも探究チャレンジステージの中学生参加やベネッセ主催のsteamフェスタの本校での実施と前進できたと考える。進路実績の向上からも、教職員の活動も活気に満ちたものになった。

説明会では、授業見学や体験授業等、ありのままの学校紹介を行った。特に極力毎回生徒の姿を見せるように工夫し、在校生・卒業生のありのままの姿をお見せした。決して学業だけではない、本校の豊かな人間性を育成する校風、チャレンジできる教育の取り組みに魅力を感じていただける方も多くいた。説明会の司会、校舎見学や受験生対応を生徒に任せることでよりリアルな学校生活を想像できたと考える。また、中学入試は保護者がメインとなるため、第一志望に指名してくださった保護者には丁寧にイベント情報などを共有し、サポートに専念した。

中学入試では、大手予備校に配慮し、通常2月2日に実施していた入試を2月3日とすることで受験のしやすさを第一に考えた。適性検査型入試では公立一貫校受験塾の最大手「ena」の第1地区、第5地区会議にも参加し、定期的な情報発信などを通して良いアピールができた。

結果として適性検査型入試の出願数が増えた。しかし、今後学校としての実績を残し、10年先を見据えた募集をするために、2科・4科入試の合格ラインを上げ、例年の倍の不合格数を出した。日能研の受験者は増え、四谷大塚からの出願者もいたため、今後現在の大手予備校にさらにPRし、優秀な人材に受験してもらえよう努力したい。

普通コース入学生は42名と昨年度より3名減少となったものの、倍の不合格数を出したことの影響は少なかった。今年度も受験生が偏差値だけでなく、学校の雰囲気や取り組みをみて学校を選択する傾向があり、多くの学内説明会を通じて本校の生徒を主体とした学校づくりに興味をもって頂けたのだと考えている。日能研、四谷大塚、SAPIXの広報誌企画にも参入したのが大きかったと思われる。

高校普通科受験に関しては、共学化以来最も厳しい推薦基準となったため、総合進学単願の受験者が10名以上減少した。そのため、高校普通科160名という結果だった。しかしその一方で普通科は併願受験生の歩留まりが約32%で推移し、優秀な生徒が入学してくれた。各コース入試平均点が例年に比べ、20点上がったことは大きい。来年度以降も、都内の中3生の数は変わらず推移していき、本校の併願先の都立高校は軒並み高倍率であるため、歩留まりは良いと考える。単願受験者をしっかりと確保した上で、併願者は都立の比較的倍率の高い高校(都立江北・足立・小岩等)の併願校として認知してもらうことが必要である。外部相談会や模試会場貸し出しを利用して、来校してもらう機会をより増やす予定。また、今年度は卒業生から早稲田大学・東京藝術大学合格もでたため、しっかりアピールする方針である。

その他、例年通り中高生徒から有志を募り、「上野学園コンシェルジュ」を組織、学校説明会時の受付、施設案内、個別相談など生徒達が主体となって説明会の運営に関わる場を作った。今年度は、8月にオープンスクールもあったため、多忙だったと思われる。しかし、受験生と等身大の本校生徒達と関わる機会を設けることで、受験生とその保護者の持つ入試への不安等を和らげることができた。アンケート結果からも、「上野学園コンシェルジュ」の存在が受験へと導いた例が数多くあり、その成果があったことがわかった。

卒業生へのインタビューでもこの組織に参加することは、本校生徒にとっても教育上大変良い影響を生んでいる、という実感を得た。早稲田大学に合格した生徒もコンシェルジュである。近年、大学進学においても総合型選抜・公募推薦入試で特別活動を重視する傾向であり、本校生徒の大学進学の活動実績につながると考えている。今年度も、コンシェルジュの生徒が年内大学入試で合格を勝ち取っている。

② 塾訪問・学校訪問

例年通り、エデュケーターサポート社の塾訪問代行のサービスを取り入れ、年間600塾以上を訪問いただいた。担当者は何度も本校に足を運び、学校の中身をよく理解した上で訪問をしてくれた。アポイントを取って訪問をしてくれるので、その後に繋がる塾も多く、教室での学校説明を実施させていただいた教室もあった。また、同社はenaのグループ会社であり、enaのエリア長会議に年間2回出席させていただき、直接学校の情報を先生方にお伝えすることもできた。これによって、各エリアに情報を下ろしていただいたのも、受験生増員につながった。

塾訪問プログラムに参加していない学校は、enaへの塾訪問ができなくなっているもので、より緊密な関係を維持したい。ようやく3年目に入ったこともあり、良い意味で「音楽だけの学校ではない上野学園」が塾の先生にも定着してきた。

中学校訪問は、各教員の担当を3校にし、年間最低2回の訪問をお願いした。広報室の教員

には積極的に塾訪問をしてもらった。ena, 首都圏模試、V 模試、北辰模試への会場貸し出しを行ったことで出願増加にもつながった。来年度は、さらに積極的な貸し出しを行い、広報活動に繋げていきたい。

③ 中学校音楽コース、高等学校音楽科生徒募集の実施

学内の行事、演奏会など外部受験生へ広報しながら募集活動を行った。また、問い合わせのあった方々を「体験レッスン」へと導き、実技担当の先生方にレッスンしていただいた。

短大入試広報とも連携して「夏期・冬期受験講習会」を実施し、本校へ受験希望の方たちへ、基礎科目や実技レッスンを受講してもらった。

広報の方法

ア 学校 HP での音楽行事の掲載

イ 学校ブログでの掲載

ウ 学校 SNS での告知

エ 音楽楽器店でのチラシの配布

オ 小学校・中学校への学校案内発送

カ 卒業生への学校案内発送

キ 受験生対象の学校説明会や外部説明会や個別相談などの実施

各種行事を通しての広報

各種学内演奏会、外部との連携演奏会、外部講師を招いての公開講座また公開レッスン等の開催時に来場者への資料の配布。個別相談の対応。

卒業生

高校音楽科卒業生のうち一人学内優先入試で短大（声楽）に1名が進学、また1名は東京藝術大学（ピアノ）へ現役合格、という結果を残すことができた。

入学生

受験生はいたものの、入学手続き者がおらず、高校音楽科の入学者はなかった。

2) 学力レベル向上への取り組み

前年において大きな成果を確認することができた「探究的な学び」を教育の軸とし、さらには「基礎的・基本的な知識・技能の習得」、「課題を解決するための思考力・判断力・表現力」、「主体的に学習に取り組む態度」といった学びの三要素を、あらゆる教育場面において意識できるよう、多くの対話機会を設けることに重点を置いた。

キャリア形成支援に関しても、前年度同様に、探究学習を通して、それぞれの生徒が力を発揮できる場面や環境を見出し、ひとり一人のさまざまな気づきや学びを基に、パラレルにキャリアを選択する進路支援、個別対話、担任を含めた鼎談を多く実施した。

受験学年に関しては、全員5回以上の対話、多い生徒では年間で40回を超える対話を実施している。その結果、四年制大学への進学率は85.7%、短期大学1%、専門学校8%、受験準備が5%となった。学年内の全国模試上位層（偏差値帯60～68）は、一般入試を前提としながら、探究活動の深まりを判断基準とし、国公立含めた難関大への学校推薦、総合型選抜も併用した。難関大の合格は、前年度学年の受験生によるものが大半であるが、2021年度入学生としては、早稲田大学や明治大学、立命館アジア太平洋大学といった難関大への合格も出た。前年同様、「Times Higher Education (THE)」が発表する大学ランキングで、「研究力」

「教育力」「社会貢献力」が高く評価される難関大学へ、特進、総進問わず、総合型選抜を用いて合格を果たした。3年間の探究活動を通して育成した力が、パラレルルートでのキャリア形成に繋がり、GMARCHレベルの基礎学力を醸成しながら、志望理由等の精度を高めた。また、外部の探究コンテストや研究発表等でのアカデミックな成果は、総合型選抜の高い合格率へと繋がったといえる。

1 生徒ひとり一人のeラーニングへの支援、伴走および学習データを用いたキャリア対話の実施（学内教員担当）、学内教員によるキャリア対話を複数回実施、学びに対するヒアリング、コーチングを行った。eラーニングによる学びの到達度の把握と基礎力や応用力の向上を支援する対話機会の構築を徹底した。

2 中高全学年対象のプログラム実施

高校生を中心に、東京大・慶應義塾大・産業能率大・桜美林大との高大連携プログラム、ベネッセ・リクルート・鹿島との産学連携プログラム、PLIJ・未来の教室・SDGsユース(慶應三田会)との次世代教育プログラム実施、全国各地の高校との越境プログラムなど、幅広く学校外連携を実施した。またALCO検定対策講座、サマースクール・ウィンタースクールを実施。STEAM・ART・Academic・文化/国際Design・Communicationの6領域23の外部専門家による放課後チャレンジ講座には、中学生は全員、高校生も多くの生徒が受講した。理系、数学、宇宙プロジェクト、プログラミング、英会話等、様々な講座を開講し、興味関心から主体的な学びへと接続した。

3 各種検定の実施

各教科で学ぶ力の到達度を測る検定を各種実施した。目標達成への意欲を高めるため、検定合格に向けた教員の伴走の充実を図った。(英語検定、GTEC、漢字検定、数学検定、硬筆・毛筆書写技能検定、ニュース検定、プログラミング検定等)

4 自学自習の構築

生徒の自習を促す環境として、まなびコーチングとの連携、放課後自習スペースALCO(After School Learning Commons)のデザインと運用を開始した。その効果は大きく、全校生徒の84%が利活用、全体の主体的学習度も改善している。ALCO教室長との面談、より深いコーチング面談、資格取得支援の英検道場、数学のキャッチアップなど、個々の学びへ接続されるプログラムを充実させることで、学校全体の学習度の上昇が見られた。生徒は、本校オリジナルで作成した「SAKURA手帳」を活用し、自らスケジュールリングやタスク管理を行っている。また「Classi」、「スタディサプリ」自学支援オンラインツールの活用も深まり、未習範囲や取りこぼした範囲も、映像やWEB問題で振り返られるようになった。アダプティブな学習とその支援体制がICTツールによって構築された。特に、e-learningと授業連携に関しては、フラグシップとなるクラスを設定し、授業内シラバス、考查内容、終礼時における相互学習、非同期型の目標設定、進捗度共有、ワークショップの実施等に取り組み、大きな学習成果データを得ることが出来た。現在、全体へ向けてのリデザインとブラッシュアップに取り組んでいる。

5 各フロア的环境整理

気づきや学びの最大化、創造性を伸ばすために、クリエイティブな環境へと各種設備を整え始めた。特に、進路室内や4Fフロアのリニューアル、整備を進めている。

3) 教員の指導力強化

本年度は、昨年度と同様に全授業公開週間を2学期まで設け新任教員だけではなく全教員が効果的に経験を積み、能力を向上できる機会を作った。さらに、3学期は全教科に公開授業を実施してもらい、新学習指導要領での各教科での取り組みを教科間で共有し、教科を越えて授業作りや評価のつけ方など継続的に検討できる場を設けた。

教員の指導力強化に当たっては、私立中高協会や私学財団、塾等の外部機関が主催する研修やセミナー、研究会等への積極的な参加を促進しており、多くの教員が実際に自身の能力向上に資すると考える研修等に参加した。研修等に参加した教員は、その内容を、職員会議で発表し、他の教員と情報共有を行った。特に、生成AIに関する研修に関しては、参加した教員を講師とし、適切に生成AIを利用するための教員研修会を開催した。

さらに、「探究科」を設置し、中学におけるフィールドワーク・卒業研究、高校における探究学習について研究・実践を行った。教員、生徒とともに何ができるか時間をかけて検討した。中学1・2年生では地域財産を活用したフィールドワーク、SDGsと関連させた体験研究日を実施した。中学3年生では卒業研究に加え、平和学習と関連した修学旅行を新たに実践した。一方、高校1年生では、自己探究に加え、桜美林大学との高大連携プログラムを実践した。高校2・3年生でのゼミ活動を実践し、高校2年生ではチーム探究、高校3年生では個人探究に取り組み、上級生が下級生の指導を行った。高校全体での取り組みとしては、4月には高校1・2年生が高校3年生の発表を聞きフィードバックを行うポスターセッションを実施し、学年の枠を越えた取り組みを行った。そのなかで、いくつかのチームは外部のコンテストにも参加した。また、年度末には1年の集大成として「探究チャレンジステージ」を実施し、各学年の代表者による発表を行い、外部の審査員からの講評をいただき、次年度に向けての足がかりとした。

こうした、教員の指導力強化、探究学習の研究・実践と並行し、授業環境の改善も昨年度同様、継続して行った。具体的には、中学1年～高校3年まで、一人1台iPadを所有し、授業で活用できる体制を整えた。また、各教室だけでなく特別教室にもプロジェクターを設置し、iPadを用いた授業の効率化を実現した。

4) 生徒指導の充実

本年度も、遅刻指導、生徒心得(校則・ルール)の見直し、組織的指導体制の確立の3点を目標とし生活指導の充実に取り組んだ。

特に、携帯電話、iPadの校内ルールを見直し、教員の共通理解を図るとともに、生徒にも全体周知を行い、携帯、電子機器に関する講話も実施した。

組織的指導体制の確立については、現場の最先端である担任が生徒指導的事象において孤立することのないよう、生徒指導案件では審議の段階から度々会議を開いてコンセンサスを図り、また、実際の指導的場面では生徒指導部と学年、担任で当たることによって個々の生徒に対してより効果的な指導を求めた。また、上記の遅刻指導も担任が一人で大変な生徒を抱えないよう組織的に指導していくことを意図したものである。その中で、いじめ対策委員会を開催し、共通理解のものと指導を行った事例もある。また、残念ながら、昨年度のいじめ問題について、対応が遅れ、重大事案として、本年度対処した事案もあった。

学校行事については、コロナが第5類になったことにともない、コロナ以前の体制で行うことができたが、一方で、生徒主体の行事運営が、教員負担を大きく増やし、教員の働き方改革

の視点から、行事の精選を検討する必要があるという課題も生まれている。

〔生徒会行事〕

実施日	行事名	対象
4月10日(月)	新入生オリエンテーション・部活説明会	新中1・高1
4月10日(月)	自転車安全教室	自転車通学希望者
6月16日(金)	体育大会	全校生徒
9月16日(土) 9月17日(日)	桜鏡祭	全校生徒
10月23日(月)～ 26日(木)	生徒会選挙	全校生徒

5) 生徒の健康と安全

- 1 校内の救急体制の整備のため、下記取り組みを行った。
 - ① 健康上注意が必要な生徒の共有
保健調査票や健康相談から実技教科などで配慮が必要な生徒について、校内で共有した。
 - ② 食物アレルギーの知識の普及・研修会の実施
食物アレルギーのある生徒を共有した。職員会議で食物アレルギーの緊急時の対応を確認した。
 - ③ 救命救急講習会の実施
教職員・生徒希望者対象の普通救命講習会を7月に実施した。
- 2 健康教育として、専門機関による出張講座を実施した。
 - ① 中学2年生 1月 喫煙防止 学校薬剤師
 - ② 中学3年生 1月 危険薬物防止 学校薬剤師
 - ③ 高校1年生 7月 メンタルヘルス講習会 台東保健所保健師
 - ④ 高校2年生 1月 HIV エイズ予防啓発講座 台東保健所主催 NPO 法人ふれいす東京
- 3 特性のある生徒や不登校生徒に対する組織的な支援体制を築いた。
中学生・高校1年生の配慮を要する生徒について、担任からの報告のもと、月1回の情報交換会（サポート委員会）を管理職、中学・高1学年主任、養護およびスクールカウンセラーで開催し、対応について協議した。
- 4 校内をはじめ課外活動や宿泊行事における感染症対策を実施した。
宿泊行事前の健康調査や学校医健診を実施した。感染症流行期には学級閉鎖（自宅学習）措置をとった。

6) 中学校音楽コースおよび高等学校音楽科生徒によるコンサート

本年度に実施した中学校音楽コース、高等学校音楽科生徒出演の主な演奏会は下記の通り。

〔令和5年度 中学校音楽コース・高等学校音楽科生徒による主なコンサート〕

実施日	演奏会	会場
5月13日(土)	中二・高二演奏会	飛行船シアター
6月24日(土)	高等学校音楽科 千野宜大先生ピアノ公開レッスン	飛行船シアター
7月11日(火)	演奏家コース室内楽前期発表会	第1リハーサル室
7月18日(月)	都立総合芸術高校交流演奏会	都立総合芸術高校講堂
9月17日(日)	桜鏡祭演奏会	飛行船シアター
11月11日(土)	高等学校音楽科 高橋淳先生の声楽公開レッスン	第1リハーサル室
11月15日(水)	中学校音楽コース・高校音楽科 マティアス・キルシュネライト先生 公開レッスン&ミニコンサート	第1リハーサル室
11月25日(土)	中高総合演奏会(中学高音楽コース・高校音楽科)	飛行船シアター
12月16日(土)	高3音A組 演奏研究発表会	アンサンブル室
2月17日(土)	高校卒業演奏会	飛行船シアター
3月13日(水)	演奏家コース室内楽後期発表会	第1リハーサル室
3月16日(土)	中学卒業演奏会	飛行船シアター

<法人部門>

1) 人事政策と人件費の削減

① 新たな人事評価制度の構築

定量的に測定できる指標を模索した人事評価制度の検討は、多様な評価視点・方法を複合的に活用でき、教職員の業績を客観的に審査できる評価シートの作成等が非常に困難であること。

また、評価の目的を定め教職員への理解も得なければならず、停滞している状況。

② 事務処理体制の見直し

全事務業務の再点検を実施。その結果を検証しながら、効率的な人員配置を目指したが、検証が十分ではなく次年度への課題となった。

③ 事務業務マニュアルの作成

次世代を担う人材の指導・育成に繋げるための整備は進んでいる。

2) 人件費の抑制計画

教職員の適正配置等により、人件費の適正化を進める。

- ① 教職員の賞与について人事評価制度を設けても、人件費抑制には繋がらず、改めて検討が必要。
- ② 非常勤講師の人員の適正化は継続して行っているが、大学廃止に伴う教員の処遇を含めた対応が課題となった。
- ③ 教職員の時間外労働について、昨年10月より規制をし、その効果が見られた。引き続き勤怠管理を徹底し、抑制を行う。

3) 経費削減（人件費を除く）／光熱費の削減の取り組み

月毎の光熱費の推移を確認しながら、削減のため、下記の取り組みをした。

- ① 空調や照明等のこまめな ON/OFF を続け、光熱費の削減に努めた。
- ② 20 時退館の奨励を行った。
- ③ 夏期及び冬期の一斉休館期間を設けた。

以上